

# 世界をみつめて1

## 「考古学とシュリーマン」

南 博史



考古学はもっとも一般の人々になじみのある学問の一つである。新しい発見のニュースなどが新聞やテレビで取り上げられることが多く、さまざまな書籍も出版されている。さらに考古学者が活躍するアニメや映画もある。

4回の「世界をみつめて」では、世界各地での考古学のエピソードを織り交ぜながら、考古学の知られざる一面に迫ってみたい。今回と次回は、考古学が学問として成り立っているもっとも基本で重要な方法と、それが故に日本で起こった「旧石器ねつ造事件」をとりあげる。

考古学はどのような学問なのか。研究者によって多少違いはあるが、人類の歴史を遺跡や遺物から復元する学問としていいだろう。つまり歴史学の一つであり、文字資料をもとにした文献学に対して、遺跡や遺物という地中から発見される過去の人々の生活の痕跡、道具、残滓、あるいは過去の建造物をもとに歴史を復元する。したがって、とくに文字のない時代や文化の歴史を復元するためには考古学が必ず必要となる。

一方、考古学を人類学の一分野とする捉え方もある。つまり、考古学の目的は過去の人々の社会や文化から、人間社会や文化の成り立ちなどの法則性を明らかにすることにあるとする。しかし、その資料が遺跡や遺物であることは同じである。つまり、考古学の独自性は、遺跡と遺物の研究の方法にある。したがって考古学の世界では、「物言わぬ遺跡・遺物に語らせる」という表現がしばしば使われる。

そして、考古学にとって地下に眠る遺跡や遺物を発見する発掘調査は、そのもっとも基本的で重要な方法である。現在、発掘調査は必ず層位学的方法によって行われている。層位学とは、18世紀に発見された地層累重の法則（上下に重なる二つの地層のうち、下位にある地層は上位の地層より必ず古い）を基礎とするもので、今では当たり前のことではあるが、これが明らかになることによって、それぞれの地層に含まれる遺物や遺構に相対的な新古関係を与えられるようになった。さらに考古学は、これに遺物の型式学的研究と地域的な広がりを加えることで、ある地域を一つの相対的な枠組み（編年表）の中に位置づける研究を進めているのである。

近年は、自然科学的年代測定法が多数発明され、それぞれの地層や遺物からその絶対的な年代を与えることができるようになった。この両者によって、近代考古学はその科学性が担保されており、基礎となる層位学的調査、つまり上から順番に下へ、新しいところから古いところへ向かって調査していく方法が確立した。

さて、世界で初めて層位学的な発掘調査を行ったのは、ドイツのハインリッヒ・シュリーマン（1822-1890年）と言われている。子どものころに読み聞かされたギリシア神話に登場するトロイアが実在すると信じ、独自で考古学を学んだ彼が、1870年トルコ（当時はオスマン帝国）のヒサルルクの丘で発掘調査を始め、その存在を考古学的に確かめたという話は大変有名である。続く1873年にはいわゆる「プリモアスの財宝」を発見し世界を驚かせた。

ただし、彼の逸話はその後かなり脚色され、神話化されたものとされている。また、発見した遺物も、トルコからドイツへの不法持ち出し、第二次大戦後の旧ソ連への秘密裏の移送もあって、所有権争い（現在は、プーシキン美術館に所蔵）が起こっており、今も多くの謎とロマン、そして古代遺産の帰属問題という現代的課題も持っている。

一方、彼が考古学の専門的教育を受けていなかったため、遺跡に再検証ができないような大きな被害があったという批判もある。しかし、確かに彼は折り重なる地層を確認し、そこに含まれる遺物や焼土からこの地層をトロイア戦争によるものと推定したのである。

現在、トロイア戦争相当層は上層にあって、彼が推測した土層はそれより1000年ほど古い（紀元前2500～前2200年）ことがわかっている。ただし、それはシュリーマン以降の約100年にわたる考古学の進歩によって書き換えられたものである。つまり層位学の確立へ向けての調査技術の進歩と多くの研究者の倫理感に考古学は支えられていた。

その前提が大きく崩れる事件が、20世紀末の日本で起こるのである。

みなみ ひろし（教授・考古学）